

小 渚 し ち

小渚しちは、1847年（弘化4年）、上野国（こうずけのくに）石井村（現在の群馬県前橋市）に生まれました。幼いころから母より糸取りを習い、家計を助けていました。

15才のときに製糸工場へ働きに出ましたが、わずか1年で独立し、座繰（ざくり）業を始めました。17才のときに結婚したものの、相手とうまくいかず、仕事で知り合った中島伊勢松（のちの徳治郎）と家を出ました。その旅の途中で、三河国に良質なまゆがとれると聞き、二川で製糸業を始めます。最初は女工12人でしたが、工場を移転するたびに大きくなり、わずか4年後には女工50人を抱えるようになりました。

やがて二川から豊橋へ製糸工場が広がっていったころ、しちは玉まゆの活用を思いつきます。玉まゆは一つのまゆの中にさなぎが2匹入っているために、真綿にしか使えませんでした。しちの工夫で糸を取ることに成功します。安くて品質のよい玉まゆの織物は、日本各地だけでなく海外にも輸出されました。そうして1897年（明治30年）、現在の二川地区市民館があった場所に、敷地面積200坪もの大きな工場「糸徳製糸場」を建てました。さらに現在二川病院がある場所に第二工場、二川幼稚園がある場所に女工たちの学校が建てられ、二川にはしちがおし進めた製糸業を支える施設が多く立ち並んでいました。

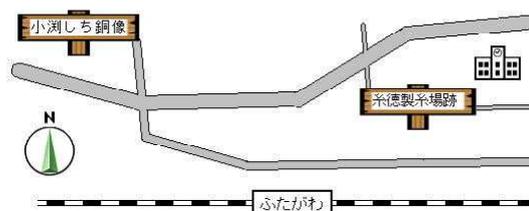
豊橋の町は「絹都」と呼ばれ、生糸がさかんな町として発展をとげました。しちは1929年（昭和4年）83才で亡くなりました。

しちは、従業員千人をかかえる大工場主になっても、女工と同じように寝起きし、同じものを食べたのだそうです。学校に行かなかったので、読み書きは苦手でしたが、女工さんのために力をつくしました。

現在、しちの製糸工場はすでにありませんが、岩屋山のふもとに二川の町を見守る銅像が建っています。



小渚しち史跡（しせき）マップ



参考文献『蚕人伝 玉糸製糸の先覚者 小渚しち』丸山義二

二川小学校 古田博一